



プロジェクトニュース



シエラレオネ 地域開発能力向上 (CDCD) プロジェクト

「シエラレオネからの招へい者が東松島市へ
- 東日本大震災からの復興経験を学ぶ - 」号

2017年7月13日号 (Vol.44)

7月5日～8日にかけて、本プロジェクトのカウンターパートである、シエラレオネ地方自治地域開発省大臣、地方自治体職員らが、東日本大震災からの復興に取り組む宮城県東松島市を訪問しました。

シエラレオネからの一行は、東松島市の一般社団法人 HOPE が運営するスタディツアーに参加しました。東松島市長表敬、市民との意見交換、市役所復興政策課からの講義、備蓄倉庫、震災伝承館、メガソーラーパーク、地元特産品販売店「Harappa」など、市や市民の皆さんの取り組みを視察しました。

震災伝承館では、被災時の写真やビデオを見て、シエラレオネの皆さんは、甚大な被害状況を真剣に見入っていました。被災地視察を案内してくださったボランティアの門馬さんから、津波で甚大な被害を受けた野蒜地区、防潮堤、集団移転地などを案内していただきました。

「震災後、私たちは外国や国内の沢山の人たちから支援を受けてきました。そのご恩をお返しをするために、私たちは自分ができることをしているだけです。」とご自身の思いを話す門馬さん。案内が終わった別れ際に、「かつて自分が住んでいた被災地に戻ると、当時のことを思い出して辛くなる。でも、こうして自分の経験を招へいや研修参加者に皆さんに話すことができると、気持ちが楽になります。」と率直な気持ちを話してくださいました。

東松島市復興政策課の小野寺さんからは、同市のコミュニティによる復旧・復興の取り組みが紹介されました。小野寺さんは「8つの自主防災組織が被災後の対応に、大きな役割を果たしました。特に『共助』による、炊き出し、行方不明者の確認、避難所の運営などの話し合いが自主的に行われました。これは、震災前から、市民による主体的な組織活動が行われていたからです。復興計画づくりでは、避難所に自治体職員が出向き、大人から中学生までが復興計画づくりの話し合いに参加しました。」とお話してくださいました。一方、仮設住宅に残る方々、不登校者を含む被災者の心のケア、土地活用の推進など、今後の課題も共有されました。



震災発生時刻で止まっている

旧野蒜駅の時計

あおい地区協議会の皆さんからは、「日本一の町にしたい。その理由は『子供・孫たちが住みやすい町、亡くなった方の魂を迎える町、助けていただいたか方たちへのお礼』の思いを込めています。」というお話がありました。シエラレオネの皆さんは、あおい地区の人々が年に120回を超える話し合いを行い、自治体と住民がともに町を作ってきた道のりを聞くことができました。「大人と子どもが一緒に決めるまちづくり。『あおい』地区の名前は、子供たちが決めたものです。」と、小野会長は笑顔で、住民が協力して作ってきた町づくりを振り返りました。

参加者からは、「2011年の3月11日、東日本大震災の状況をテレビで見ました。しかし、被災地の現実を知る本が周辺にはありませんでした。現地で直接会って被災者の方から話を聞いたことは非常に有意義でした。住民と共に作る復興計画のプロセスや、被災者の話や伝承館でのビデオは忘れられません。」といった声が聞かれました。



被災地を案内して下さった
門馬さん（右から二人目）と大臣（左）

大臣からは、「今回視察した東松島市の取り組みから、被災の現実を受け入れること、そして次の災害に備えること。インフラの復興だけでなく、心の復興の大切さを学びました。特に、コミュニティによる『共助』の精神が重要で、お互いに支えあう気持ちと仕組みを整備して、人々が孤立することを避けることの大切さを再確認しました。シエラレオネに戻ったら、日本で学んだことを関係者と共有し、次の災害に備え、コミュニティが主体となった復興をさらに推進させたいと思います。」と、シエラレオネに戻った後の抱負を語ってくれました。



あおい地区協議会役員の方々と
大臣（前列中央）らとの記念写真

東松島市の皆さんの笑顔に迎えられ、招へい事業を無事終えることができました。日本での学びをもとに、今後のシエラレオネの大臣、参加者による現地での活用に注目です。

以上